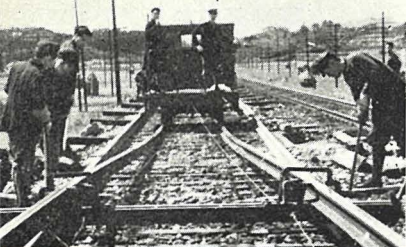


上映映画解説

1953, 10.10~11.25

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



No. 13

フィルム・ライブラリーについて

国立近代美術館では、設立以来同館内に定員約百名の映写室をもつフィルム・ライブラリーを設け、内外古今の優秀映画の収集保存ならびにその活用について努力いたしております。

今回は「四人の画家」展の期間中、種々の分野の短篇映画の代表的作品として、次の映画の中適宜撰択して毎日二時、四時の二回上映いたします。

鉄道に生きる 三巻

日本国有鉄道製作、内外映画社作品

演出 関川秀雄
撮影 中尾駿一郎

これは、鉄道輸送における保線の役割の重要性と、作業に従事する保線工手のためまぬ労苦とを描き、代表的な保線作業の実況を紹介するとともに、世人の関心の外に黙黙としてたらきつづける、鉄路の人びとへの認識を深めようとする作品である。

内容は、軌道固め作業・検測車による精密測定・タイタンパーによる作業・枕木更換・列車閉塞・軌條更換・橋梁枕木更換・保線区配置状況・災害復旧作業の九つのシーケンスに分かれている。そして前半は、機械化された保線作業の情景に重点をおき、後半は、劇的な表現方式によつて、保線工手の献身的な活動の強調にとめていくが、全篇の基調をなすものは、輸送の安全を確保するためにはらわれている蔭の苦心と努力への共感であつて、それが、この作品を、単なる保線工事の記録以上のものにしあげている。この作品が各方面の教育映画コンクールにおいて好評をくわし、また一九五二年のベニスにおける第八回国際映画博覧会の記録映画部門で二等賞を勝ちえたのは、なによりもそうした製作関係者の心がまえと、それが適切な演出で具体化されていることによるといえるであらう。

生きているパン 二巻

日本映画社作品
演出 奥山大六郎
撮影 小林米作

これはすぐれた科学映画の一例であつて、パンの製造に用いられるイースト菌が、どのような生態を呈し、どのような活動を見せるかを、東大農学部協力のよ

り、暗視野顕微鏡撮影と微速度撮影の技法を駆使して説明している。

イースト菌は空気中にも、花蜜・果物・小麦粉などの中にもいて、低温ではじつとしていて、三十度ぐらいになると、活発に芽生し、糖分を吸つてアルコールと炭酸ガスにかえ、小麦粉の中のグルテンと相まつてパンをふくらませる。しかし、五十度近くになるとイースト菌は死んでしまい、乳酸菌などの活動が活発になつて、酸味のあるパンや糸を引くパンができるようになる。

映画は、このように私たちの食生活と深い関係のある、イースト菌の生きていくすがたとそのもたらすものを、暗視野顕微鏡に連結した微速度カメラを用いて、あくまで科学的にしかも興味深く描きだしている。見るものは、それによつて、人間と密接なつながりをもつ・微小世界の秘密をはつきりするとらえ、それに即して正しい対処のしかたをくふうすることができる。この作品に二四年の文部大臣賞と朝日文化賞が与えられた理由は、そのような着眼点とそれを生かした努力と技術に求められるのである。

慈悲心鳥 二巻

理研映画作品
演出 下村兼史
撮影 佐野時雄

この映画は、「或る日の干潟」以来、鳥を中心とする動物たちのドキュメントの上に立つて、それを客観的に観察させるといふよりも、その中に強調されている劇的なものを見る人に印象づけようとする、特異な記録映画をつぎつぎに送りだしてきた、個性的な作家下村氏の戦前における代表作の一つである。

慈悲心鳥は「十一」の別名で、春から夏にかけて本邦に渡来する一種の渡り鳥、そしてみずから巣をいとなむことなく、主としてルリ類の巣の中に産卵し、かえつたひな鳥はその仮親にはぐくまれて成長する。画面にも現われているが、それが仮親の子どもたちを巣からけおとしてしまつたり、自分よりはるかに小さい仮親からえさを与えてもらつたりする情景は、まことに印象的であつて、そうしたこと自然界の冷厳な事実であるが承知して、いながら、なにか見るもの心が逆なでされるような感を与えられる。作者の関心と目標も正にそうしたところにあつたのであらう。しかし、この作品全体としては、動物の世界の出来

事に託して作者の考えかたや感じかたを提示しようとするいきかたがそれほど強烈に現われていず、むしろ生態科学映画の色彩がより前面に出ているということが出来る。この意味で本映画は「或る日の沼池」とよい対照をなすものであり、両者の比較によつて記録映画のありかたを考える上でおもしろい手がかりを提供してくれている。

或る日の沼池 二巻

東宝教育映画作品
演出 下村兼史

この作品は、「自然界にはたえず生存のためのたかいたがくりひろげられている」ということを基本テーマとし、雷魚とみさごを主演者にして作られた、一篇の記録的物語映画であるといふことができる。生態科学映画の面ももちろん見られるが、その主眼は、動物の生態を表現手段として「自然界のドラマ」を組みたて、劇的な感銘をもちあげる点におかれている。そうしたいきかたは、この作者の全作品をたぬいていけるが、その最も強く現われた場合が本映画なのである。

沼池の中のさまざまな小動物の行動(それは「生態」といふよりも、丹念な努力の結果として演出された「行動」と見る方がより適切である、この傾向は作者の出世作「或る日の干潟」にも示されていたが、本映画ではそれがさらにおし進められている)や、みさご夫妻の生活情景などが、「おとなの童話」的なあつかいなどで描きだされていることは、一方において、見るものの感興をよびおこすゆえんになるが、他方においては、記録映画の観点からして「いきすぎ」の批判を招くかもしれないものとなつてくる。

いずれにせよ、「或る日の沼池」は、この作者の特異な作風が最も強烈に発せられた戦後の作品として、同時に上映される戦前の「慈悲心鳥」と比較鑑賞していただきたい。その上さらに、記録映画とフィクションの問題、「記録」と「演出」の問題などについて、一考をついやしていただくことも興味深いものがあるうと考えられる。

ワン・ゴグ Van Gogh
ゴキヤン Gauguin
一六ミリ 二巻
一六ミリ 二巻
日仏学院提供